

平成 27 年 9 月 12 日

南 の 風 1 4 7

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤 原 敬 一

間が空いてしまいました。全中報告です。(145号を参照してください)

1Pから徹底した二島のオールコートプレスも、長身者を擁する坂本には効果的でした。ボール運びに時間を掛けさせ、坂本が得意とするフロントコートのセンターを中心にしたプレイを封じたことが勝因となりました。4Pでは坂本もオールコートディフェンスに出ますが、及びませんでした。

①のタクティクスに関するもう一つの例です。予選の藤浪VS相模女子のゲームです。最終の結果は17点差で藤浪の勝ちです。3P終了時は42対41の接戦で相模女子がリードでした。

ここでは、タクティクスに限定して書きます。このゲームで藤浪は、1P~2Pにかけてドリブルドライブモーションに非常に拘っていました。ノーマークがいるのにドリブルドライブモーションから攻撃を始めていました。確かに藤浪のガード、フォワードはドリブルが速く、切り裂く力を持っています。ドリブルドライブからキックアウトの合わせも多少あったのですが、ドライブからのカットインで突っ込むことが多い印象でした。

「なぜなのか」です。私見ですが、根拠は前のゲームにあるようです。藤浪は前のおおさか薫英とのゲームで、1Pの開始5分シュートが決まらず、1対8になります。中間距離のシュートがことごとく落ちました。たまたまタイムアウトを取ります。しかしその後もオフェンスが機能せず、1Pの終了時には9対19でした。このゲーム、結局最後は55対51で藤浪が勝ちますが、ベンチは何か手を打たねばと感じたと思います。(予選リーグは1日2試合です)

薫英戦の入りのシュート決定率の悪さが、相模女子戦のドリブルドライブモーションに拘った要因だと思っています。なぜなら、ドリブルスクリーンやバックドアカットを交えながら行う、ドリブルドライブモーションはパターンオフェンスとして、**迷いなく行えるから**です。おそらく藤浪ベンチは、薫英戦の教訓を生かし「迷いなくシュートを打たそう」としたのだと思います。また、藤浪は1Pからオールコートマンツーマンでスタートしました。兎に角、選手にあれこれ考えることをさせず、プレイに集中させたかったのだと推測できます。因みに4Pは、ドリブルドライブに拘ることなく攻めましたが、シュートの決定率も安定し、攻撃のリズムもよくなってきました。

2例を挙げてタクティクスを紹介しました。孫子の兵法の中に、『彼を知り己を知れば、百戦危うからず』というのがあります。正にそんな感じの2ゲームでした。

次に、②のニュートラルボールへの対処です。二島、藤浪、所沢山口の3チームは、ルーズボールへの反応がずば抜けて早かったです。プレイ、ボールの行方、相手の位置の予測や読みが抜群でした。

一例です。オフェンスリバウンドに入る際の、シュート軌跡の確認による落下点の予測が素晴らしかったです。またルーズボールを取りに行く時に、相手の選手の動きをブロックしてからボールを確保するなど、目立たないところでのスキルがきちんとできていました。こういうことは、頭では分かっているチームも多いと思います。しかし、ゲームの中できちんとやる。常にやるチームは少ないのです。経験による場馴れもあるでしょう。集中力の持続も見逃せません。 参考になりました。